

貨幣史研究会（東日本部会）第4回  
平成12年7月13日（木）13:30～17:20

<出席者>

座長：鈴木公雄・慶應義塾大学教授

報告：高瀬弘一郎・慶應義塾大学教授

その他の参加者（五十音順）：

今村啓爾・東京大学教授

岩橋 勝・松山大学教授

桜井英治・北海道大学助教授

櫻木晋一・下関市立大学教授

田代和生・慶應義塾大学教授

田中浩司・函館大学専任講師

中島圭一・慶應義塾大学助教授

名城邦夫・名古屋学院大学教授

家島彦一・東京外国語大学教授

報告の概要ならびに討議の様様

(1) 報告「大航海時代における銀」（慶應義塾大学・高瀬弘一郎教授、詳細は別添参照）

（ポルトガルの銀貨体制確立と喜望峰迂回インド航路の開拓）

- ・ ポルトガルは、1489年に貨幣制度を改革し、vintem貨を基本とした銀貨体制を確立した。この要因として、①15世紀中頃からのヨーロッパ東部・中央部の銀山の復興、②大航海事業の展開（金の流入・蓄積が進展）や砂糖増産による経済基盤強化を背景とした銀入手のための財源確保、等が挙げられる。
- ・ 15世紀末の喜望峰を迂回するインド航路の開拓は、ポルトガル銀貨の東インドへの流れを増大させる上で、決定的な意味を持った。16世紀初めにインドに送付されたのは銀と銅が主であり、このうち銀については、ドイツの諸都市やアントワープ（現在のベルギー内に位置した商業都市）の市場で買い付けられ、リスボン造幣局で銀貨に鑄造されたものが大半を占める。

（スペイン real 銀貨とポルトガルの商業活動について）

- ・ 1520年代頃から、ポルトガル商人の海外における精力的な活動を背景に、取引決済時の代価として受け取ったスペイン銀貨 real 貨がポルトガル国内に流入し始め、次第に自国の vintem 貨やポルトガル real 貨が駆逐されスペイン real 貨が優位に立つようにな

った。

- ・ 1558年、スペイン real 貨が全ポルトガル領内で通用する旨法律で規定され、国内の主要な銀貨となった。さらに、このスペイン real 貨は、東インドや北ヨーロッパにも流出していった。
- ・ また、16世紀中頃からはペルーやメキシコで産出された銀の一部が、銀貨および銀塊の形でポルトガルに流入するようになった。
- ・ なお、ヨーロッパにある銀鉱山の産出高は、1535年をピークに下降し始め、1560年から急減。1600～1620年のヨーロッパ全土の年間銀産出量は、1526～1535年の1/4に減少し、ポルトガル銀貨鑄造に用いられる銀の供給源としてのアントワープやアムステルダムへの地位は崩壊した。

#### (新大陸における銀採掘の発展)

- ・ アメリカ新大陸のスペイン植民地における銀採掘は、ヨーロッパにおける一大銀採掘ブームを引き継ぐ形で展開。1554年にスペイン・セビリア出身の商人がスペイン領メキシコのパチュカにおいて水銀と塩を使用する銀の精錬方法であるアマルガム法を開発し、その手法がメキシコ内の銀山に広まっていった。
- ・ また、同じくスペイン領ペルーの銀山でも、1572年にアマルガム法の導入に成功。これにより、1545年に発見されたポトシ（ボリビア）銀山での産出量も急増した。ポトシにおける銀生産は、16世紀の第4四半世紀にはペルーの銀生産の70%超に上り、新大陸全体の銀生産の半分を占めた。
- ・ もっとも、新大陸全体の銀生産高は1625～1640年にピークに達し、その後徐々に下降線を辿り、1680年以降、急激に低下した。

#### (スペインの新大陸における銀貨鑄造)

- ・ 新大陸を発見後、スペイン国王はすぐに同地を植民地化するとともに、1535年にはメキシコ市、サンタ・フェ、ポトシ、サント・ドミンゴに造幣局を設立するよう命じた。新大陸で鑄造された銀貨は、スペイン本国においても同価値で通用する旨規定された。

#### (ポルトガルの新大陸、インド、およびマレー世界における経済活動)

- ・ 1554年、ポルトガルはブラジルの地サン・パウロ市を建設し、インディオ（奴隷）狩りや銀鉱発見のための拠点とした。もっとも、ブラジルに銀鉱は存在せず、サン・パウロの近くでわずかに金が採掘されたに過ぎなかった。
- ・ またポルトガルは、16世紀から17世紀初めにかけてアフリカでも銀鉱探索を進め、アンゴラにおいてチコワ銀鉱（モノモタパ王国内）を発見。しかしながら、アフリカでも相当額の銀産出を確かなものとするような銀鉱を発見するには至らなかった。
- ・ ヨーロッパにおいて、1489年から1555年までの間に金の値は31.2%上昇したのに対

し、銀は 11.1%しか上昇しなかった。これはメキシコやペルーで産出された銀がヨーロッパに流入したことによるものである。

- 1510 年、ポルトガルの第 2 代インド総督 Afonso de Albuquerque が定めた貨幣制度は、以前からその土地で用いられていた金貨・銀貨・銅貨からなる制度に倣ったものである。
- また、このインド総督 Albuquerque は、マラッカ（現在のマレーシア）において、ペルシアで通用していた銀貨 larim 貨の鑄造を命じた。この larim 貨は、マラッカのみならず中国にまで流通したという。その後マラッカでは、cruzado de prata 銀貨が鑄造され、同地における基本的貨幣となった。
- リスボンからインドに銀を送るポルトガル商人は、リスボンで 2,400 reis の価値であった銀塊を、インドのゴア造幣局に 3,300reis で売却することにより、37.5%の利益を得た。こうした銀輸出に伴う利益獲得の有利性もあって、リスボンから大量の銀がインドに流入した。
- 1578 年にインド総督に就任（2 度目）した D.Luis de Ataide は、銀 71%、銅 29%からなる xerafim 貨の鑄造を命じ、従来の銀貨に比べて銀の品位を低下させた。もっとも、インド領内における財政逼迫のため、重量と額面価値は変更しなかった。
- 銀品位の低い xerafim 貨がインドで額面価値を据え置いたまま鑄造されていたこともあって、ポルトガル商人が本国からインドに銀貨の原材料となる銀を送付することによる利益率は、16 世紀末には 50%に上った。このため、ポルトガル国王は、1591 年にインドにおける xerafim 貨の新規鑄造を禁止し、現有の xerafim 貨の通用は 2 年間に限定したうえ、この間における real 貨との両替については 15%の打歩をつけることを命じた。この real 貨および xerafim 貨の両替レート固定化により、ポルトガルの胡椒商人や銀輸出業者の利益獲得機会は減少した。その後、インドに渡来する船団は real 貨や larim 貨等のみを積んでくることとなったが、こうした貨幣はすぐに、中国やマラッカ、さらにはムガル帝国に流出していった。

#### （インド洋世界の貨幣流通）

- 16 世紀半ば、ペルシア湾のオルムズからインドに、大量のペルシア銀貨 larim 貨が流入し、その波及効果はマラッカや中国までに及んだ。larim 貨は、インド全土において最も広く通用していた貨幣であった。
- もっとも、1580～1590 年になると、インド全域およびマラッカにおいて、real 貨が流通するようになり、中国の貿易商人は必ずこの貨幣を求めた。
- ポルトガル商人が香料諸島（モルッカ諸島）で香料を購入するためには、支払手段としてインド北部のグジャラートやバラガートで綿布を入手する必要がある。この綿布購入のため、大量の real 貨がインド北部の諸都市に流入した。

(フィリピンおよびマレー世界における貨幣流通)

- 1565 年に、アカプルコ～フィリピンの貿易ルートが開拓されると、メキシコ銀およびペルー銀で鑄造した新大陸の real 貨が、マニラを經由して東インドに流入し始める。この間、大量の real 貨がメキシコからフィリピンにもたらされ、帰途において中国産の生糸がメキシコに持ち帰られた。
- 1571 年に、スペイン人によりマニラ市が建設されると、以降、中国商人が多数この地に渡来。中国商人は、生糸や各種織物、象牙や各種金属、香料や磁器などをマニラにもたらし、この代価として唯一 real 貨を本国に持ち帰った。また中国商人がマニラにもたらし商品、若干のフィリピン産の品物とともに、メキシコへ送られた。
- 新大陸からフィリピン経由で中国に輸出された銀は、17 世紀初めの最盛期において、毎年 200 万～300 万 pesos (約 54,760～82,140 kg) に上った。
- 1570 年代の半ば以降、フィリピンは real 貨流通の中心地となり、日本にもその影響が及んだ。すなわち、日本からフィリピンに渡航する船は、粉・塩漬けの肉や魚・屏風・武器・兵器等を運び、これらは、一部がフィリピン諸島内で消費され、他はメキシコ向けに輸出された。そして日本船は、帰途において、中国産の生糸や金だけでなく、スペインの品々やメキシコの貨幣を持ち帰った。もっとも、日本は銀の大産出国であったため、中国人ほどには real 貨を珍重しなかった。
- また同じ頃、マレー半島 (マラッカ王国) に始まりカリマンタン (ボルネオ) 島・スラウェシ (セレベス) 島・フィリピン諸島南部・モルッカ諸島などを包含するマレー世界にも real 貨が浸透し、流布することになった。
- 1603 年、ポルトガル国王はインド総督に対し、マラッカ商人が綿布を売却する際の代価として香料のみを受け取ることとし、real 貨の受け取りを禁じる旨命じた。しかし、この勅令はなかなか遵守されなかったとみられる。

(フィリピンおよびマレー世界における貨幣流通)

- インドにおける real 貨の価値は、1569～1582 年に急上昇して 1624 年頃ピークに達し、以後下落していった。
- 16 世紀末期におけるメキシコ～フィリピン間貿易の増大により、それまで新大陸からセビリアに供給されていた銀の量は減少し、それ故にリスボンやゴアへの real 貨の補給が困難となって、ポルトガル植民地政府は中国生糸の独占権を失った。このため、ポルトガル政府はメキシコ～フィリピン間の貿易を縮小するよう働きかけたが、金銀比価の問題等もあり実効が上がりなかった。
- 大航海時代を迎え、ヨーロッパにおける金銀比価は、1:10.75～12、ペルシアでは約 1:10 であったのに対し、インドでは約 1:8、中国では 1:6～8 程度であったとみられる。こうした金銀比価の差異を背景として、インドと中国は新大陸の銀を吸収していった。すなわち、長い間この地域における金銀の価格差を解消する手段がなかったところに、喜望

峰迂回ルートが開拓されたため、この価格差を埋める形で大量の銀がもたらされたのである。そしてさらに、世界中で銀が最も高価な中国と、最も安価なメキシコ・ペルーとを直接結ぶルートが開拓されたことにより、直接的な銀の流れはもはや阻止できないほど盛んになった。

- ・ この間、日本では石見銀山の開発を契機として、各地で銀山の開発が展開され、新大陸以外において唯一ポトシ（銀の供給基地）の役割を果たしていた。小葉田淳氏は、17世紀初めにおける日本銀の中国への輸出額は年間 4～5 万貫（150,000～187,500 kg）に上ったと試算している。

（参考）大航海時代における銀貨の使用状況

年代	ポルトガル	インド	マレー世界・中国	新大陸(ペルー・メキシコ等)
1489年	・銀貨体制確立			
1498年	・喜望峯迂回のインド航路開拓			
1510年		・ポルトガルのインド総督が金銀銅3貨による貨幣制度制定		
1520年代	・国内にスペインreal貨流入し始める			
1535年頃	・ヨーロッパにおける銀産出ピーク			・メキシコ市・その他各地に造幣局設立
1545年頃				・ポトシ銀山発見
1554年				・アマルガム法(銀の精錬方法)開発 ・ポルトガルがブラジルにサンパウロ市を建設
1558年	・国内でスペインreal貨の流通認可			
1565年			・アカポリコ～フィリピンルート開拓	
1569年		・xerafim貨の铸造開始 ・ポルトガルからインドへの銀輸出盛んに		
1571年			・スペインがフィリピンにマニラ市を建設 ・同地におけるreal貨の流出が盛んに	
1572年				・ポトシ銀山にアマルガム法導入(銀産出量急増)
1591年		・xerafim貨とreal貨の両替レート固定		
1625～1640年				・新大陸の銀産出量がピークに(1680年以降、急激に低下)

(2) 高瀬報告に関する討議の模様（文中敬称略）

（桜井）報告の中で触れていた「reis」、ならびに「maravedis」という単位について、もう一度説明してほしい。

（高瀬）いずれも貨幣の最も基本的な単位で、前者はポルトガル、後者はスペインで用い

られたものである。

(家島) インドのゴア造幣局で鑄造された xerafim 貨の話をしてしたが、同貨には銀貨だけでなく金貨も存在したはずである。

また、larim 貨は、15～17 世紀のインド洋世界で通用した基本通貨の 1 つで、南イランの「ラール」という都市名から名付けられたものであると考えられる。元来地金として用いられ、筒状のものを適宜切り取り、重量を計ったうえで取引されていたという。

インド洋世界では、以前から交易の決済手段として銀が用いられることが多く、長い間、銀欠乏の状態が続いていた。こうした中、ポルトガルやスペインが当地の交易活動に入り込むようになった訳であるが、もともと銀を受け入れる基盤ができていたといえる。

なお、報告で触れていたアフリカ・モノモタパ王国産出の銀は、銀貨に鑄造されてインド洋世界にも流入しており、重要な貨幣の 1 つとして用いられたようである。

(田代) スペインやポルトガルおよび新大陸からインドに銀を供給する際、real 貨などの銀貨に鑄造したうえで送り込まれることが多かったようだが、これはなぜか。品位や形状を統一しなければならぬ必要性があったのか。もしかしたら、スペイン＝ポルトガル国王に、real 貨を世界中で通用する通貨にしようとの意図があったのかもしれない。

(高瀬) real 貨自体が、本国のその周辺だけでなく、新大陸やアジア地域でも使用できる流通性の高い貨幣であったことが大きな理由であると考えられる。

(鈴木) real 貨は国際通貨としての意図を持って発行されたかどうかは、今後検討する必要があると思うが、現在は不明である。ただ、交易を行う際の決済手段として、双方で同一の貨幣が使用されていた方が便利であることは間違いなく、少なくとも新大陸においては、real 貨が十分に流通する環境が必要であったであろう。

(岩橋) 15、16 世紀にスペイン本国および新大陸で鑄造された銀貨（ほとんどが real 貨）の品位は、どれも 93%とされているが、この中途半端な品位がどうも気になる。

西日本部会でも「江戸時代に入って最初に鑄造・発行された慶長丁銀の品位がなぜ 80%とされたのか」ということがよく議論されるが、この品位 93%の銀貨というのは、地金と貨幣の関係を考えるうえでも大変興味深いところである。

例えば、鑄造コストなどが関係するのであろうか。

(鈴木) 指摘のとおり、real 貨の鑄造コストと品位との間には大きな関係があると思う。おそらく、新大陸では real 貨を鑄造するにあたり、インディオ（奴隷）を使って、採鉱の時点から人件費を度外視した重労働を課したことが予想され、本国に比べてはるかに安いコストで鑄造できたに違いない。本国と新大陸それぞれにおける real 貨の鑄造量を調べると、問題解明の糸口が掴めるのではなかろうか。

(田代) このほか、real 貨の原材料として用いられた銀と銅の比価も、品位を決める際の重要なファクターであったと考えられる。わが国では銀に比べて銅の価格が非常に安かったため、丁銀鑄造に際し、20%以上の銅が用いられている。

(名城) ドイツのフランケン地方で鑄造された銀貨には、わが国の丁銀と同様、品位 80%

の銀貨やさらに銀品位の低いものも存在することから、当時のヨーロッパにおける銅の価格は、銀に比して割高であったとは考えにくい。これを real 貨に当てはめれば、品位が 93% 以下でも良さそうであるが、高品位が保たれたということは、「銀銅比価のみで real 貨の銅混合比率が決められたわけではない」ということを物語っているのではないか。

（鈴木）新大陸からの銀輸出が急増した理由として、アマルガム法の導入が挙げられていたが、同方法を行うには、万全な設備が整ってない環境では、水銀を熱する際に作業者が水銀の蒸気を浴びたりする危険性が高かったと思われる。おそらく、こうした劣悪な労働環境においてこそ、多くのインディオが酷使されたのであろう。

（名城）ヨーロッパ貨幣史をみると、12 世紀末に初めて高額銀貨が発行され、その後 13 世紀中頃に、ドイツやイタリアを中心に金貨が盛んに流通するようになったといわれている。報告では、スペインにおいて主に銀貨が流通していたようであるが、金貨は流通しなかったのか。

（高瀬）銀貨だけでなく、金貨や銅貨も流通しており、3 種類の貨幣が並存していた。報告では銀貨のみの鑄造・流通状況のみを取り上げて紹介した。

以 上